

序

全身性エリテマトーデス（SLE）は病因が不明の難病で、全国におよそ6～7万人の患者がいるとされています。20～30歳代の女性に多く発症し、全身の臓器が侵されることのある自己免疫疾患の代表的な疾病です。小児発症の症例は、20歳以下で3,500人、15歳以下で1,500人と推定されています。したがって、決して稀な疾患ではありませんが、日常の診療で頻繁にであう疾患ではありません。適切な診断と治療により、生存率はかなり良くなってきていますが、疾患の重篤性から、可能な限り専門医のコントロール下での診療が求められています。

ただし、小児科でのリウマチ専門医の数を考えると、当初の診療は小児科の一般医が担当するケースが多く、また成人のリウマチ専門医が最初からコンサルトや診療に関与するケースもあると考えられます。また、小児の患児が成人になるにつれて、小児科と内科との連携（トランジション）がスムーズにいくことも期待されています。

SLEは疾患自体の多様性が高く、その診断の困難さがあり、さらに治療薬の選択基準や使用法が明確でなく、診療施設による治療法の不均一性が目立つ疾患でもあります。したがってエビデンスを生むための臨床試験を行うことは容易ではありません。そのようなことから、成人のSLEに関してもきちんとしたガイドラインが存在せず、現在、日本リウマチ学会も協力して、厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業「自己免疫疾患に関する調査研究班」SLE分科会（代表 渥美達也 教授）による診療ガイドラインが作成される途上にあります。

そのような中で、日本小児リウマチ学会と日本リウマチ学会の協力のもと、森雅亮教授を代表とした研究班の方々により、本「小児全身性エリテマトーデス（SLE）診療の手引き2018年版」が作成されたことは、大変重要なことと考えます。小児科と内科の一般診療医、リウマチ専門医がそれぞれの立場から患児に向き合い、お互いに共通の疾患認識と理解を持ちつつ診療にあたるための貴重な基盤になることを期待しつつ、本手引きの序文とさせていただきます。

2018年3月

一般社団法人日本リウマチ学会 理事長
山本一彦